那　　須　（松井教官）

昭和４２年１０月１３日～１６日

１３・１４日　鹿島川の追跡による泉・上川毛付近の微地形の観察

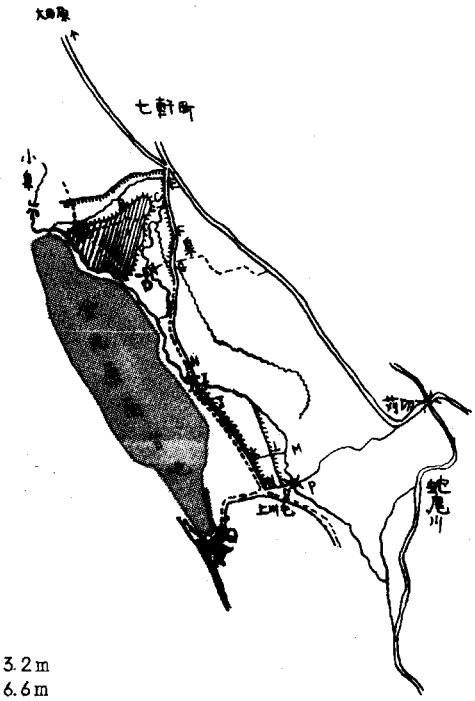
１５日　　高林付近の観察

１６日　　鹿島川上流深川西付近の観察

〔鹿島川の追跡〕

図に示したように，ＡからＤの地点の崖の比高を比べると，下流になるに従い，鹿島川の下刻作用がだんだん激しくなっている。どこかに遷移点があるらしいという事が分った。崖を追跡することにより，図に斜線で示した小起伏面を認めることが出来た。図のＥ―Ｆ地点間の比高が６ｍあった。扇状地のため，南下するに従い，低くなるのか，それとも一段下の面なのか，はっきりしなかった。Ｉ点で橋から川底までの深さを測定した。（紐の先に石を結びつけ，垂直に降ろした。巡検の際には，長めの紐を用意すると便利である。）深さは，４.３５ｍだった。Ｈ点と川底との比高は６.６ｍである。かなり深く切り込んでいる事が分った。

大田原市南東部略図



Ａ 0.7 ｍの崖
Ｂ 0.85ｍ〃
Ｃ 3.0 ｍ〃
Ｄ 3.3 ｍ〃
Ｅ―Ｆ比高６ｍ
Ｄ―Ｇ（Ｄ―Ｆ）3.2ｍ
Ｈ―Ｉ（Ｇ―Ｉ）6.6ｍ
　Ｉは川底
Ｊ―Ｉ　6.6ｍ
Ｋ―Ｌ（Ｊ―Ｌ）2.4ｍ
Ｌ―Ｍ　2.4ｍ
　Ｍは川べり
Ｋ―Ｎ　3ｍ
Ｑ―Ｒ　3ｍ

１：33000

図に示したように，ＪＮとＬＯという２段の小比高の段丘を認めた。小さな面が，いくつも認められることから，何回も隆起・侵蝕が繰り返されたことが想像できる。

Ｒ地点付近に泉があった。この付近の金丸原面台地では，台地の下から水がしみ出していた。こ

れは，水田に利用されているように思われる。しかし，地下水の利用は，ごく一部に限られているらしく，M地点付近の農家では，地下水はほとんど用いず，鹿島川の水をモーターで揚げて，農業に利用しているとのことだった。

１６日には，鹿島川を，上流へと追跡し，谷頭を突き止めることができた。

〔高林付近〕

大田原市内から高林までバスで車窓観察を行った。途中，揚水ポンプが目についた。バスで通過した東北本線東那須野駅は，小さな駅であるが，駅前集落が存在していた。途中，バス道路に沿って，列状集落が存在した。しかし，家屋は道路に面してはいなかった。立派な防風林が印象的であった。

高林でバスを降りた。高林の集落には，八百屋，魚屋，雑貨屋，菓子屋，医院，洋品店，小さな映画館などがあり，町的性格を呈していた。

高林の集落のはずれから，南西へ曲がり，蛇尾川の河原に出た。川巾は広かったが，地表水は全然流れていず，大小の礫がゴロゴロしているだけであった。扇状地の河川の特徴を実際に目で見て確かめることができた。

比高測定により，湯宮面と横林面との境の崖を追跡した。この崖は東西方向に走っているが，この比高測定により，面白いことがわかった。それは，崖の高さが東に向かうに従って，低くなるということである。測定開始地点での崖の比高は，約１０ｍだったが，そこから約2.5 km 東の地点での崖の比高は1.4ｍだった。しかも，それより東へ行くと，崖は認められなかった。このことから，このあたりでは，増傾斜の降起が行なわれたということが考えられる。又，この付近では，戦後の開拓農家を多く見る事が出来た。

以上のように，今回の巡検では，比高測定による微地形観察に重点がおかれた。地形面を決定する際には，細心の注意が必要なことを知り，貴重な体験となった。　　（４年　坂巻記）

第３学年・大学院

奄　美　大　島（式 教官）

昭和４３年３月２８日～３１日

式助教授を中心として大学院・学部計１４人の奄美大島本島・徳之島への合同巡検が実施された。第１図はそのルート・マップである。今回の巡検は，珊瑚海岸・隆起珊瑚礁・beach rock 等